

愛恵だより

第 17 号

2025年12月25日 発行

発行：公益財団法人 愛恵福祉支援財団

〒114-0015 東京都北区中里 2-6-1 愛恵ビル5F

電話：03-5961-9711(代) / FAX：03-5961-9712

<https://www.aikei-fukushi.org/>

「愛恵」の題字は初代理事長 三吉 保 氏による



バングラデシュと日本聾話学校に育てられて

公益財団法人 愛恵福祉支援財団
評議員 高橋 みちる

私がバングラデシュ(バングラ)と出会ったのは、看護師をしながら大学で学んでいた頃です。勤めていた大学病院を辞めて参加したスタディーツアーで訪れました。一人の女医さんが「教育こそ国の力」と気づき、学校に通えない子どものために寺子屋を開き、早婚させられる少女が学び続けられる仕組みを考え、さらにもう学校も作ろうと計画されていました。

彼女が来日し、ろう学校を見学する際の道案内として同行したことで、私は初めて日本聾話学校(日聾)を訪れました。まずチャペルへ案内され「神様が建てた学校」と感じましたが、校舎は古く廊下は薄暗く、よい印象とは言えず、英語で話された説明もほとんど理解していませんでした。ただ、校長先生や教頭先生の自信と確信に満ちた姿が心に残り、その後も日聾のことが心に留まり続けました。

大学卒業後、ミッションスクールでの勤務を経て、私は日聾の教師になり、出産するまで勤めました。日聾では手話をういず「聴いて話す」子どもを育てる聴覚主導の教育が行われています。まず子どもの耳に確実にクリアな音を届け、学校でも家庭でも温かく丁寧なやり取りを積み重ねます。毎日、教師と子どもの1対1の対話の時間があり、教師が教えこむのではなく、子どもの興味に寄り添い、目を合わせて交代でおしゃべりします。歌や体の動きを楽しみ、豊かな経験が積み重ねられる中で、子どもの気持ちに言葉が添えられていきます。私は優秀な教師ではありませんでしたが、この教育の「心」と「まなざし」は今も私の大きな支えです。

一方で、私は途中からバングラの聾学校にも関わってきました。設備も資金も経験も十分でない中、先生方は子どもたちが成長していく姿にこの教育への確信と信頼を深め、どうすればもっと子どもたちが育つか、どうしたらより良く教えられるのかと、30年変わ

らぬ熱心さで学び続けています。コロナ禍で無給になっても誇りと使命感は失われず、運営団体から閉校を告げられても「この教育を絶やしてはいけない」と独立し、家族ぐるみで学校を続けている先生もいます。現在は5地域で続けられ、先生方の連帯も生まれ、地域での評価と信頼も高まっています。

この秋、長年の祈りが叶い、バングラの先生を日本に招き、日聾で研修していただきました。妹さんの結婚式を欠席してまで来日した先生は「私は仕事をしたいのではなく、目の前の人を愛したいのです」と話しておられ、日本での学びを仲間に伝える使命を胸に帰国されました。

日聾では、教育の成果が上がるほど、子どもは地域の学校へ転校していきます。設備や人材にも多くの費用がかかる中で、常に苦しい経営が続いてきました。少子化も加速し、学校はいよいよ大きな岐路に立たされています。日聾は日本で唯一聴覚主導の教育を行っています。子どもたちの心と言葉を育てるこの教育を続けていくために、校名を「きこえの学校ライシャワー学園」と改名し、改革に踏み出しました。

そんな折、還暦を数年後に控えた私に復職の話が来ました。大好きな学校ですから断る理由はないのですが、自分の足りなさを思うとおなかの奥がきゅっと縮まり、不安でいっぱいになります。そんな私に「足りないところはみんなで補い合うのが日聾ですから」と言っただき、19年ぶりに戻る決心をしました。これまで、バングラでも日聾でも必要なものはすべて神様が備えてくださるのを何度も見てきました。すべて神様が決めてくださったことと信じ、「神様、責任は取ってくださいね」とひそかに祈りつつ、感謝して新たな挑戦の春を迎えます。どうぞ皆様もライシャワー学園の子どもたちに会いにいらしてください。

(聖学院小学校 非常勤養護教諭)

「赤ちゃんのいのちを守るプロジェクト」 ドイツ視察・研修

期間 2025年9月23日～10月1日

25年先を行く —ドイツに学ぶ—

社会福祉法人賛育会の新しいプロジェクトに助成する

賛育会の原点は、1918年、東京大学YMCAの有志により始めた妊婦乳児相談所です。キリスト教の隣人愛の実践として始めた困窮する母子の保護と救済のための活動で、翌年1919年には、日本初の産院を開始しています。

賛育会は、新たな使命として「赤ちゃんのいのちを守るプロジェクト」を始めました。予期せぬ妊娠や孤立した環境での出産に苦しむ女性の存在や、嬰兒の遺棄や虐待死などの痛ましい事件があり、背景には生活困窮、DVや虐待などの深刻な社会課題があります。

本プロジェクトの3つの柱(事業)は、「妊娠したかもSOS」(夜間の匿名相談)、そして病院の「内密出産」と「ベビーバスケット」(匿名の預け入れ)です。

この度、愛恵福祉支援財団の助成により、これらの事業の先駆者であるドイツの社会福祉やソーシャルワーク、団体及び団体間の連携、社会的支援の仕組みやセーフティネットを視察する機会が与えられました。

世界初、2000年に始まったドイツのBabyklappe(ドイツ語で「赤ちゃんの扉」は、全国で約100ヵ所、

ソーシャルワークの役割を担う妊娠葛藤相談所は、全国約1,600ヵ所あります。ドイツの内密出産制度は、2014年に国によって施行されました。視察では、計2ヵ所のBabyklappe、SterniPark(民間教育団体の運営)とAGAPEの家(個人の運営)の訪問に加え、複数の妊娠葛藤相談所や相談員、研究者、市児童相談所の担当者から現状を学ぶことができました。

相談員等からの聞き取りを通して、ドイツでは母子支援のための法制度が整い、市民が支えていること、福祉とソーシャルワークの重要性と団体間連携の大切さを再認識させられました。

以下、参加者の感想より。

● 近代的な“匿名の児の預かり = Babyklappe”がドイツで始まった背景

SterniParkが、反ホロコースト教育に基づく「生きる価値のない命は存在しない。」との価値観を背景に始めたことを学びました。保育園・幼稚園を運営する同団体がドイツで最初に始めた歴史があります。2ヵ所目は個人が始めています。



匿名で預けられた赤ちゃんへの手紙



ドイツ初のBabyklappeであるSterniPark(ハンブルク)の外観写真



リューベックのAGAPEの家の看板



「捨て子プロジェクト」と書かれている

● Babyklappeの位置づけ

従来から「子どもと女性の福祉」という軸がある社会の中で、児童遺棄、という緊急事態が増えてきたことを受けて、緊急対応として、Babyklappeが始まりました(2000年)。そこから社会的議論が呼び起こされ、内密出産の法制化がなされ(2014年)、Babyklappeへの預け入れが激減しました。その結果として、各団体は児童の健全な育成や女性の支援などの本筋へのシフトが図られ、Babyklappeを廃止する団体も始めています。賛育会が「ベビーバスケット」無き未来を目指して開始した、当会の方針の意義を改めて確認できました。(遠矢允宏)

● 2カ所のBabyklappeの創業者から、直にその思いを聞くことができました。ドイツ初のSterniParkは民間教育団体、次のAGAPEの家は、個人が始めたのでした。日本のように病院主体ではありません。それぞれに赤ちゃんが遺棄されるという悲劇に心痛め、いのちの救済のための行動を起こしました。その思想・理念・情熱が原動力となり、今も続いています。印象的な2団体の創業者の言葉を紹介します。

● SterniPark 現代表「Babyklappe開設の、初年度は年間8人の赤ちゃんの預け入れがあったが、今は1人/年間で減ってきている。この25年間で、2人の赤ちゃんが預け入れられて亡くなった事例がある。それは悲痛な出来事だった。現在ハンブルクでの遺棄事件はゼロになった」、「赤ちゃんの遺棄事件が無くなり、内密出産へシフトするに伴いBabyklappeの二-

ズは減っているが、親と暮らせない子どもが増えている。様々な要因があるが、虐待やアルコール・薬物依存も問題、貧困の問題は深刻だし、子どもたちは居場所を必要としている」

● AGAPEの家創業者「Babyklappeは、“人生の《金継ぎ》のようなもの”。壊れて、バラバラのピースになった人生が、日本の伝統工芸の職人技の如く、誰かがつなぐことで元通りになる。パッチワークとは違う。やがて新しい価値を創出していく」(大江 浩)

最も弱く小さな立場にある母子のいのちの尊厳を守ることは、賛育会の原点であり、キリスト教精神に基づく使命です。赤ちゃんは、声を上げることができません。

「最も小さき者の一人にしたのは、即ち私にしたのである」(マタイ 25章 40節)

「妊娠したかもSOS」は、予期せぬ妊娠に悩み、誰にも頼れない女性(母)の妊娠SOSコールに寄り添う支援です。また「内密出産」及び「ベビーバスケット」は、母にとって最後の砦であり、赤ちゃんのいのちにとっての最初の扉です。

本来このようなプロジェクトが「不要な社会」であるべきです。みんなで支える「いのちのセーフティネット」の広がりを願い、知恵と力を尽くしたいと思います。

社会福祉法人賛育会
「赤ちゃんのいのちを守るプロジェクト」
事務局長 大江 浩

❄️ 愛恵ヒストリーポケット ❄️

初めての町民クリスマス祝会

昭和5年(1930)12月

昭和5年12月27日、荒川の北、堤北地区に、かつて耳にしたことのない「第一回町民クリスマス」がそとに師走の川風を耳にしながら夕暮の迫る愛恵学園を会場にはじまったのである。かまどに火がはいり、米飯の炊き出しがはじまった。高張り提灯が掲げられ、券を手にした人の群が黒々と続いた。歓声が、笑い声が、渦となって大天幕にこだました。

戦場のような喧騒が数時間つづき、準備した1,200食の牛丼は気持よくはけた。主催者側も招待客も心からの満足を味わうことができた。そして、この日の費用しめて99円99銭であったと記録は伝えている。

「愛恵学園物語」より



大天幕をはりめぐらしての映写会風景



ふるまわれた牛丼に集った地域の人達

新しく事業を開始しました

財団では、福祉支援をさらに多面化し、以下の事業を展開してまいります。

社会福祉育成活動推進事業における新事業

- 社会福祉を学ぶ者のうち学業優秀であるアジアの発展途上国に在籍する大学(院)生に対しての奨学金給付。
- 出版助成：先駆的な発想に基づく社会福祉の研究や革新的な社会福祉の研究教育についての出版物の発行に対しての助成。
- 寄付講座：将来を見据えた社会福祉の実践に寄与すべき教育研究について大学へ講座を提供し実践していく。

愛恵福祉支援財団 案内図

JR 駒込駅 東口より徒歩2分
 北区中里2-6-1 愛恵ビル5F
 電話 03(5961)9711



愛恵福祉支援財団
ホームページ

